

『まよいウエルカム』

西尾維新

000

どうやら、また死んでしまったらしい。

今回は着地に失敗しての、全身を強く打つての死亡である——上空数万メートルからの壮大な着地失敗とは、何とも俺様らしく誇らしい。まあ、数万メートルは言い過ぎかもしれない。しかしながら俺様としては、この落下

死を失敗に計上しようというつもりは更々ない。不死身の化物であるところの俺様は何も失ってなどいないから。元より、決死にして必死にして万死の吸血鬼であるこの俺様、デストピア・ヴィルトウォーズ・スーサイドマスタ―にとっては死など呼吸と同義である。息を吸うように死んでは、息を吐くように生き返る。そんな生活を、数万年に渡って送ってきた。まあ、数万年は言い過ぎかもしれない。とは言え、今回の落下死は、回避しようとは

思えば回避できた。むしろ回避したために生じた落下死だ。強がりではなく（強がるまでもなく、俺様は強い）。

遙かなたから格好よく滑空してきた生身の俺様が、着地点と見定めた座標に、まさかの先客がいたのがよくなかった——俺様がヘリポートにしようと思っていたちっぽけな山の頂上は、どうやらこの国の神様の住处だったようだ。俺様で言えば、かつての『死体城』だ。実は減速することなく勢いよく着地し、

出会いがしらに小山を木端微塵にしてやろうと目論んでいたのだが、さしもの俺様も、いきなりこの国の神様に危害を加えるつもりはなかった——礼節を弁えた俺様なのだ。なので小山を吹っ飛ばすつもりだった衝撃を、俺様は全部自身で食らったというわけだ。食らうのは趣味だが、衝撃まで食らうことになるうとは。

「大丈夫ですか？ 異国のお客人。客死なんて素敵過ぎますよ」

通常の手順で再生した俺様にそう声をかけてきたのは、髪を左右でふたつに縛った、年端もいかない少女だった——たぶん当たり前なのだろうが、いかにも根付いた和装姿だ。ふむ。見たところ、ここ一帯を治める土地神と言ったところらしい。蛇か？ いや、蝸牛——かな。エスカルゴを前に、一瞬俺様の芳醇な食欲が刺激されたが、やめておこう。食うためには殺さなければならぬ……、殺して喰うが俺様の流儀とは言え、しかし、ついて先ほど助けたばかりの命を、舌の根も乾かぬうちに舌の上に乗せるのでは、行動が一貫しない。

キャラがぶれるのはよくなかろう。

なので、食べる代わりに俺様は訊いた。

「おい、神様よ。この近辺にキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードという金髪の吸血鬼はいるか？」

「おや。やはり、あのかたの関係者でしたか……、ええ、一目見たらわかりましたよ、鋭

いわたしには」

鋭いらしい。そうは見えんが。

そもそも、こんな若い少女に神様が務まるのだろうか？ 変な国だ。

「見た目について、あなたにあれこれ言われたくありませんが……、鏡をご覧になったほうがいいんじゃないですか？」

「生憎、吸血鬼でな。鏡には映らん」

「それはそれは」

何を言っているのだ？ 性別を超越した妖

艶さを放つこの俺様の見た目について言及するとは神をも恐れぬ少女だ——少女が神か。

「で。キスショットは」

鋭い神様に、俺様は先を促した——知っているのならさっさと教えてもらいたい。俺様は寿命は長くとも気は短い。殺して喰うぞ。ただ、ここで両縛りの神様は、芝居がかった風に両腕を組んで、「ふーむ」などと、あからさまに勿体ぶる。

「……察するに、旧友にお会いになりいら

した感じでしょうか？　しかし、あのかたを『キスショット』と呼ぶ人物は、ふたりの従僕だけだったはずなのですが」

「ふたりの従僕？　ふん。俺様がつけた名前を俺様がどう呼ぼうと、俺様の勝手だとは思わんか？」

「なるほど。名付け親でしたか……、差し出がましいようですが、あのかたにどういったご用件で？」

お節介な神様だな。これも土地柄か。郷に入っては郷に従おう——業に入っては業に従おう。生まれついての吸血鬼であるこの俺様が食欲以外の何かに従うなど、滅多にあることではないがな。

「何。ご存知の通り、吸血鬼も今や絶滅危惧種なのでな。滅びを前に、六百年ぶりに我が眷属と旧交を温めようというだけだ。俺様の作ったあの吸血鬼が、あのプリンセスが、いたいどんないい女になったか、見てみたいというのもある」

「……あんまりお勧めしませんねえ」

これも入国審査と割り切って、問いかけに答えてやった俺様に、両縛りの神様は氣勢を削ぐようなことを言う。

「そういうのって、『昔はよかった』的な思い出のままにしておいたほうがいいんじゃないですか？ 六百年も会わなかったのであれば、もう別人みたいなものですよ」

「人ならな。俺様達は鬼だ」

「……たとえば、あなたが『どんないい女になっっているのかな？』と、わくわく楽しみにしている眷属が、八歳のくらいのいい幼女になっって人間の影に飼われていたとしたらどうします？」

いい幼女って。なんだそれは。

「ぶっ殺す。殺して喰う。幼女と人間を」
「ですよねえ。……わたしの両親って離婚しているんですけど」

神様は、さらっと話を変えた。両親？ 離婚？
どんな神様だ。元人間か？

「とりわけ最後のほうは、いったいなんで結婚したんですかと突っ込みたくなるような仲の悪さだったんですよね——この結婚は間違っていたと我先に言っていました。言い争っていました。でも、どうなんでしょうね？ 結婚当初は、その選択は、正解だったはずなんですよね」

「……………」

「正しかったはずのことが時間の経過によって間違いになってしまう——これってやりき

れない話ですよ？ 最近ですとね、鎖国っていう概念が教科書から消えたらしいんですよ。ずっとそれが正解だと教えられてきたのに今になって間違いだったと言われましてもねえ。別に何か新事実が発見されたわけじゃなくって、昔だって出島で貿易していたことはちゃんと教えられていたのに——出来事は変わらないのに、時代が変わっただけで、正解が変わるだなんて」

ふん。くだらん感傷だな。さては神様にな

りたてか？　やはり元人間？　悠久の時を生
きる吸血鬼にはそんな感傷、無縁の極みだ。
「でも、そんな感傷こそが、吸血鬼を絶滅危
惧種に追い込んだのでは？」

痛いところを突く。さすがは鋭い神様。

腹が立ったがそれ以上に腹が減っている。

このままだと怒りに任せて脈絡なく、この
エスカルゴを食ってしまいかねない——キャ
ラがぶれるのはよくないと、俺様は自分でも
驚くほどの自制心を発揮する。

「いいと思いますけどね。別によれても。正
解が変わるんですから、性格だって変わしま
すよ。それは生きている証でしょうに——変
化しないなんて死んでいるも同然でしょう」
「正解や性格はともかく、生死についての談
義を吸血鬼に振るとは、なかなか命知らずだ
な。まあいい、これも文化の違いだと受け止
めよう。いいから質問にだけ答えてくれ、異
国の神様——この近辺に、キスショット・ア
セロラオリオン・ハートアンダーブレードと

いう金髪の吸血鬼はいるか？」

「再会なさって、彼女に幻滅することがあったとしても、昔の思い出までは否定しないと約束してくれるなら、お教えしましょう」

海外からのお客様には親切にさせていただきますよ、鎖国という概念こそなくなりました。が、なぜか開国という概念はぎりぎり残ったことですし——と、神様は含みを持たせた言いかたをした。

「『昔はよかった』を拒否するのなら、『昔はダサかった』も拒否してください」

「わかった。わからんがわかった。約束しよう。たとえばキスショットが、どんなつまらん女になっていて、名付け親である俺様をどれほど失望させようとも、プリンセスとの昔の思い出にまでは失望しないと——俺様は何も失ってなどいないから」

美しい思い出は美しいままに保存しよう。たとえばどんな醜悪な現在と向き合うことになろうとも。

「では。申し遅れました、わたしは、八九寺^{はちくじ}真宵^{まよい}です。わたしは八九寺真宵といひます。このささやかな町を統治する、偉大な存在です——歓迎しますよ、決死にして必死にして万死の吸血鬼、デストピア・ヴィルトウォーゾ・スーサイドマスター。ご質問はキスヨット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードという吸血鬼はいるか、でしたね？」

「ああ、そうだ」

「いません。もう」

と、なぜか笑顔で、両縛りの神様。

（忍物語に続く……）